

『スパース性に基づく機械学習』 第1刷正誤表

この度は、標記書籍をお買い求めいただき誠にありがとうございました。
標記書籍に誤りがありました。訂正し、深くお詫び申し上げます。

ページ数	行数	位置	誤	正
5	下から 3行目		期待二乗誤差を最小化する	期待二乗誤差 (2.1) を最小化する
6	13行目		関数 f と置き直す交換	関数 f と置き直す変換
31	下から 2行目		$y_i = \mathbf{x}_i^\top \mathbf{w}, \quad i = 1, \dots, n \quad (4.1)$	$y_i = \mathbf{x}_i^\top \mathbf{w}^*, \quad i = 1, \dots, n \quad (4.1)$
34	20行目		$D(\ \cdot\ _1; \mathbf{w}^*)$ は $n = d$ でない限り,	$D(\ \cdot\ _1; \mathbf{w}^*)$ は $n \geq d$ でない限り,
42	10行目		任意の自然数 k に対して,	任意の自然数 k , 正の数 α に対して,
42	下から 5行目		第2項 (近似誤差項) が消えて	右辺第2項 (近似誤差項) および第3項が消えて
43	下から 7行目		サンプル数 n が大きくなるとともに、急速にゼロに近づきます.	サンプル数 n が大きくなるとともに、急速にゼロに近づきます。また、 α は任意であり、 α を大きくするほど、定理が成立しない確率は小さくなるものの、不等式 (5.3) の右辺は大きくなります。
44	11行目		系 5.1 では最適な閾値 η がサンプル数 n の減少関数であることに注目してください.	系 5.1 では、パラメータ q が非ゼロ要素の個数 ($q = 0$) と ℓ_1 ノルム ($q = 1$) を内挿する役割を演じていることに注意してください。つまり、 $q \rightarrow 0$ のとき、閾値 η はゼロとなり、 k は \mathbf{w}^* の非ゼロ要素の個数に等しくなります。 \mathbf{w}^* の多くの係数が非常に小さいもののゼロでない場合には、この評価は不利になります。一方、 $q \rightarrow 1$ のとき、閾値 η は無限大となり、 k はゼロ、したがって不等式 (5.3) の右辺は $1/\sqrt{n}$ の速さでしか減少しないものの、 \mathbf{w}^* の絶対値の小さい要素にはあまり影響されなくなります。また、最適な閾値 η がサンプル数 n の減少関数であることに注目してください。
56	下から 6行目		$\mathbf{y} = \mathbf{X}\mathbf{w}$ を満たす \mathbf{w} が	$\mathbf{y} = \mathbf{X}\mathbf{w}$ を満たす k スパースな \mathbf{w} が
63	18行目		次元とサンプル数関係をより明確にするため	次元とサンプル数の関係をより明確にするため
122	18行目		$\frac{\ \Delta\ _\infty}{\ \Delta\ _F/\sqrt{d_1 d_2}}$	$\frac{\ \Delta\ _{\ell_\infty}}{\ \Delta\ _F/\sqrt{d_1 d_2}}$
122	19行目		ここで、 $\ \cdot\ _\infty$ は要素ごとの ℓ_∞ ノルム,	ここで、 $\ \cdot\ _{\ell_\infty}$ は要素ごとの ℓ_∞ ノルム,
137	10行目		ノルム $\ \cdot\ _*$ に関する	ノルム $\ \cdot\ _*$ に関する